My Harp, My Life 私の楽器

私が愛用しているミネルヴァとの出会いは、確か今から12年前。ある日、着物を着た母と、スーツに身を包んだ父が家に帰ってきてこう言いました。「ミネルヴァ契約してきたよ。」ミミミ、ミネルヴァってあのサルヴィの、私がずっと欲しかったハープ…?! まさか親がそんな楽器を買ってくれるなんて! すごく嬉しくて、満面の笑顔で私が「ありがとう!」と言うと、母はこう言いました。「何言ってるの、買うのはあなたよ。」信じられません。私が支払うというのに、勝手に数百万円の楽器の契約を、私抜きでしてきたのです。それから私のローンとの闘いが始まったのですが、それはまた別の機会に…。

さてこの楽器は、世界的なハーピストであるグザヴィエ・ドゥ・メストレ氏が当時ジャパンツアーの際に使っていた楽器でした。ですので、関係者にお願いし、ハープの共鳴板の裏にメストレ氏にサインを入れていただきました。そんな素晴らしい方が、日本の素晴らしいホールで演奏した楽器が、しがない千葉の私の家に来る、と。私はその時、いつか必ずまたこの楽器を素敵なホールに連れて行けるようにがんばろう、そう心に誓ったのでした。

中村　愛

EVENT SQUARE イベント・スクエア

- 9/1 堀米綾〜江川良子デュオ 東京・同仁キリスト礼拝堂
- 9/8 アルパ&カテリーナ・コンサート 森万由美(アルパ)ほか　ギター文化館
- 10/7 ティコムーン 東京・六本木アークヒルズ カラヤン広場
- 11/10 福井麻衣 他 京都コンサートホール
- 11/16 吉野直子 他 東京文化会館
- 11/23 中村愛、池山由香 他「2つの竪琴」オランピアモーニングコンサート 東京オペラシティ3階 近江楽堂

The Last Chorus

●GTF会員講師募集中

ただ今、銀座十字屋では、ハープ教室運営やハープ講師を各地でされている皆様が、情報交換やお得な各種サポートを受けられるコミュニティ・サービス「GTF(銀座十字屋ティーチャーズ・フォーラム)を開設、皆様の参加を募っております。下記まで、お気軽にお問い合わせください。
harplife@ginzajujiya.com

●銀座十字屋展示会情報

今年も10月に福岡・広島・大阪・名古屋の4会場にて「Salvi Harps秋の展示会」を開催いたします。たくさんのハープに触れていただけるこの機会、ぜひ見逃しなく。詳しい日程は随時、銀座十字屋HPで掲載いたします。

情報寄稿先:harplife@ginzajujiya.com　発行人/倉田恭伸　編集人/森　泰義

A MAGAZINE FOR THE HARP PLAYER

HARP LIFE

08
2018

ハープと皆様を繋げる
オンリー・ハープなフリーペーパー

FIRST ISSUE
Vol.1

SALVI VICTORIA

Message

創刊メッセージ

サルヴィ・ハープスとライオン・アンド・ヒーリー・ハープス代表して、私は銀座十字屋による「ハープ・ライフ」刊行に、大きな喜びを感じております。この冊子は、日本のハープ・コミュニティに貴重なハープ関連情報を広めるためのとても有用な情報源となるでしょう。

また、私は本誌が、ハープを演奏する皆様の関心と日々の努力を動機付け、上達するための手助けになると確信しています。本誌を発行してくださった銀座十字屋と、ハープを心から愛する日本の皆様に心から感謝申し上げます。

SALVI HARPS、LYON&HEALY HARPS：CEO

マルコ・サルヴィ

夏真っ盛りのこの時期に、「ハープライフ」を創刊することになりました。「もっと早く出せなかったのか」「芸術の秋にでも出した方がよかったんじゃない?」という声が聞こえてきそうです。改めまして銀座十字屋の倉田です。創刊に先立ちまして挨拶文を書けと言われまして、それはそれは普段使わない脳みそをフル回転で回しているのですが、なかなか言葉が続かないんですね。よく作家の方も原稿執筆にあたって、「神が降臨するのを待っている」といって締め切りが過ぎてもじっと座って担当編集者を困らせるシーンがありますが、まさにその状態なのです。

さて前置きが長くなりましたが本題です。今回ハープライフをなぜ創刊したのか、という根っこのお話を綴ります。創業から144年の営みの中で、私たちが大切にしている価値観があります。それは、「他と同じでないこと、新しいチャレンジをし続けること、すべてはお客様のために」です。

日本でハープのある生活が浸透し多くの方が気軽に身近にハープを楽しめるようになるには、情報発信に尽きるという想いがありました。また、もともと私たちは書店で出版業を生業にしてきた経緯があります。そう振り返るなか、一つの道標として情報発信の原点回帰を目指すことにしたのです。

今回、社員であり編集長となるジェイク森の力を借り、日本初のハープ専門のフリーペーパーを発刊するというチャレンジの機会を得ることができました。皆さんに楽しんで読んでいただける、もしくは目から鱗が落ちるようなコンテンツを取り揃えて、まさに上質な「ハープライフ」を提供できればこんな光栄なことはありません。皆様の期待に応えられる媒体を目指し敢為邁往の気持ちで臨みます。

森がですがね…(;^ω^) よろしくお願いいたします。

株式会社銀座十字屋：CEO

倉田 恭伸

季節のおすすめハープ Vol.1

このコーナーでは、
毎号1台ずつ銀座十字屋がおすすめする、
素敵なサルヴィハープを
紹介致して参ります。

ベース音の響きが、最高に気持ちいい。

第1回目は、イリス・ナチュラルです。ご存知のように、サルヴィハープはモデルによって個性が異なります。同様にハーピストも各自個性を持っています。用途や音の好みで自分に最もフィットする一台を、ぜひ店頭や銀座十字屋ハープセンターで試奏しながら決めて頂きたいのですが、イリスはプロ受けする機種と言えるかもしれません。ステージに立つ時、奏者がまず何を考えるかといえば、「ここまで来たら、自分を信じて集中すること」ではないでしょうか。失敗できないときに、あなたの頼もしい味方になってくれるハープの中の1台であるように思います。

イリスの特性をサーシャ・ボルダチョフに訊ねたら、こんな回答が返ってきました。「オーケストラや共演者がいる際の演奏には、最高の相棒。まずは音に芯があり正確な音が出る。均整のとれたボディに、演奏者の要求に応える精緻なメカニック。ベース音の響きが最高に気持ちいい」。もちろんサルヴィのラインアップには、イリスよりもさらに高額なハープもございます。しかし、プロの中には敢えてイリスで演奏会に臨む人は意外と多いのです。しかも、個性的な人ほどそういう傾向が強いようです。楽器の安定性ゆえに実力が透かし見えてしまう。けれどもそれは取りも直さず、自分を表現するに際し、自分が出したい音が出て、ありのままの自分を表現したいスタイリストたちが手にするハープといえるのではないでしょうか。仕上げは、世界でも特に日本人が好むナチュラル。木目をダイレクトに表出させたボディは、歳を重ねるごとに風合と愛着が増すでしょう。そして間違いなく手放せない愛器になるはずです。

Iris Natural

イリス・ナチュラル

Special Interview

Kumiko Inoue

歩み続けるとき。

創刊特別インタビュー 井上久美子

Kumiko Inoue profile

東京芸術大学大学院在学中にオランダ政府の奨学金を得て、フィア・ベルクハウト女史のもとに留学。1967年8月ザルツブルクのモーツァルテウム管弦楽団と協演、同年12月シュトゥットガルトフィルハーモニーの独奏者として、ドイツとオーストリアを演奏旅行。1968年4月アムステルダムのコンセルトヘボウでデビューリサイタル。1970年9月イスラエルの国際ハープコンテストで第4位入賞。以来、ヨーロッパと南北アメリカの各地で演奏。1981年「世界ハープ会議」設立と同時にその副会長に指名される。1983年7月オランダで開かれた世界ハープ会議第1回総会のオープニングコンサートで演奏。1986年6月ふたたびアメリカハープ協会の総会に招かれ、武満徹の作品を紹介。1997年10月と2002年4月にはワルシャワ「ショパン記念音楽アカデミー」に招かれて演奏をおこなう。イスラエル、イタリア、フランス、ロシア、アメリカ、スペイン、中国の国際コンクールの審査員、ポーランド、韓国、香港、イタリア、中国などでマスターコースの講師をつとめる。現在、世界ハープ会議（World Harp Congress）コーポレーション・メンバー、日本ハープ協会理事、武蔵野音楽大学特任教授。

本誌創刊にあたって、井上久美子さんを訪ねた。この冊子が、ハープを学ぶ生徒とそれを支える先生のためにあるからだ。日本ハープ界の草分け。現役のプロ・ハープ奏者であり、セミナーを開けば即完売の名伯楽。どちらの立場にとっても、スタートの特集に相応しい方と思ったからだ。そんな彼女に、「これからハープを始める方や、日々レッスンに工夫を凝らす講師の方々に、エールを送って頂こう」という気持ちだった。小柄な方だが背筋が伸び、当意即妙な応対も相俟って存在感が半端ではない。幾つかの質問が終わって、レッスンについて尋ねた時である。先生と生徒、目指す未来は同じである。誰しもがハープを上達したい、させたい。だが現実的には、挫折や失敗からハープを辞めてしまう例もある。なぜ、理想に辿りつかないのかと問うた。

「レッスンとは、両者の覚悟をぶつけ合う場なのです」…井上さんは断言した。

井上さんがハープを始めた頃は、1ドル=360円の時代で、ハープ価格はヨーロッパの3倍。国内の絶対台数も少ない。大学に入るまでは、知人からレンタルしていた。それでもモルナール先生とベルクハウト先生という偉大な師にも恵まれ、オランダ政府の奨学生にもなった。夏の長期休暇は一人ぼっちになり、見かねたヴィクトール・サルヴィ（サルヴィ創業者）が、自宅に寄宿させてくれたりもした。楽旅は、船底の船室で往く船旅!事前に想像していた井上さん像とは正反対で、彼女はむしろ苦学生としてゼロからのスタートを切っていたのだ。今は地方から直接世界を目指せる環境もあるし、設備やテクノロジーは向上しているし、楽器の性能は昔と比べるべくもない。これからの人たちへの井上さんのジレンマとは、「なぜ踏み出せる一歩を踏み出そうとしないのか」ということに尽きる。「いやいや、先生はラッキーだったから」と言うかもしれないが、少なくとも井上さんは全くのゼロから始め、行動によって幸運を自ら引き寄せたように思えるのである。

レッスンとは、両者の覚悟をぶつけ合う場なのです。

最初の一歩の大切さは、先生たちにも向けられる。「指の形。最初に正しい形を覚えさせないと、後から悪い癖を直すには時間がかかるのです」と、全くの初心者へ教える先生たちにも警鐘を鳴らす。セミナーで生徒さんと対峙すると、日本各地で指の形が皆バラバラなのだという。さらに世界中のハープ会議に飛び回る井上さんは、ハープ・メーカーにも注文をつける。「メーカーによって、弦と弦の間の幅が違う。ピアノは88鍵どのメーカーでも同じでしょ?ハープもせめてこの間隔は統一すべき」と。ハープ界全体を見渡して、やはりハープは世界基準に統一してゆくべきと達観している。苦心惨憺（くしんさんたん）の末、理想の奏法や問題点を見出してきたからこそ、冒頭の言葉が口をついて出たのだろう。つまり、ハープが好きということが前提にはなるが、「そこに覚悟はあるか」ということ。

生徒側には本当は不満があったり、苦しんだりしているのに、それを先生に打ち明けられていないのではないか。先生も自分が生徒であった頃を忘れ、自身が学びをやめて、生徒へ正面から本音で寄り添っていないのではないか。ハープを好きであること、人間を好きになること、これらはプロセスの違いこそあれ、根っこは一緒なのだと仰っているようにも思えた。

▲CD:「ハープ・リサイタル／井上久美子」は、今や古典的な銘盤に。

▲教えている際の集中力と才能を見抜く洞察力とで、セミナーはすぐに満員に。

最後に、冒険の効用について語ってくれたのは、「人間、何か楽しくて刺激になることがあると、それで火が着くってこともあるのよね」ということ。そして「嫌なことがあったら、3日枕で泣きなさい」という金言も残してくれた。可能性に対し自分を鼓舞し続けること。音楽が楽器を通じたコミュニケーションに他ならないとしたら、人との出会いを大切にすることも同義だということ。それらを矜持（きょうじ）に、井上さんは今も歩み続けている。

Harp Caravan

ハープ・キャラバン第1回

金城学院高等学校 ハープアンサンブル部

日本各地のハープが輝いている街／輝いているハーピストたちへお邪魔する企画「ハープ・キャラバン」の第1回は、金城学院高等学校ハープアンサンブル部である。同学院の柱であるキリスト教教育のもとに1975年に創設された同部は、結成40年に及ぶ歴史をもっている。ハープだけの部活動をこれだけ長く運営されている学校は珍しく、日本にも数校しかない。1年生8名、2年生10名、3年生8名の合計26名という人気クラブでもある。

部員の皆さんに話を伺うと、「ゲームで『ゼルダの伝説』にハープが出てきて、初めてハープを知り、それがきっかけで入部した」という現代っ子らしい側面もある一方で、やはり伝統あるクラブらしく先輩と後輩の関係が実に良好に保たれているという特長があるのに気付く。最初は、手をマメだらけにしながらも追い付くのに必死。先輩に指導されたり、できないパートのサポートを受けたりしながら、今度は自分の後輩ができたとき、いつしか自分にも先輩である自覚も芽生え、気付くと上達している。そんな好ましいサイクルが、同部には根付いている。演奏機会が豊富であることも、良い意味で緊張感の持続につながっているようだ。校内の新入生歓迎会、文化祭、クリスマス礼拝のみならず、地域の教会や病院、老人ホームや街作りサポーターとしてのイベント参加まで、演奏が地域貢献にも直結しているのが素晴らしい。いまは、来年2月の定期演奏会へ向けて、和気あいあいと練習を重ねている。

同校の卒業生で現在コーチを務めているハープ奏者の三宅百合子先生は語る。「生徒たちの多くは、部活動の時間にハープを弾くことを楽しみに登校してくると思うので、そのモチベーションをまずは大切にしてあげることから始めます」と。創部43年目を迎え、卒業生たちの想いも受け継ぎ、伝統を支え自らもやがては歴史の一部になってゆく生徒たちへ、そうしたコーチや顧問の先生方の熱意がキリスト教主義に基づく教育の一環として生徒にも伝播（でんぱ）され、奉仕活動や定期演奏会などへ反映／還元される。ハープ愛に溢れた理想的な循環が、本邦でも稀な高校生ハープアンサンブルの継続に繋がっているのだろう。

「ハープは、聖書にも登場するほど古くから神を賛美するための楽器であり、人々の心を穏やかな気持ちにさせる楽器で、やはり生徒たちにもそんな心豊かな音楽表現をしてほしいので、指2本で演奏するのではなくて、左右4本ずつの指を使って日々の練習に励んでいます」。敷居が高いと躊躇（ちゅうちょ）して、ついハープにトライするのをあきらめてしまう向きも多いかと思うが、同部の熱心な練習風景を見ていると、まさに「意志あるところに道は拓ける」という言葉を実感した。

心からエールを贈りたいクラブである。

◀コーチとして指導に当たる三宅百合子先生